

音声学・音韻論の研究

山田 英二

今期(2013.4-2014.3)の英語音声学・音韻論分野は、例年に比べ多くの論文が出版され、活況を呈した。

国内の学会誌・紀要におけるこの分野の論文は、52篇見出された。特に、今期を特徴付けるのは、日本音声学会の学会誌『音声研究』で「英語音韻論の新たな事実・解釈・問題解決を掘り起こす」というテーマのもとに、特集が組まれ、英文での特集論文が5篇掲載されたことである。現在「英語音韻」について何が言えるのか、いまだ「英語」には掘り出すべき鉱脈が残っているのかを探ったものであった。最適性理論の出現からほぼ20年になる節目の年においてこうした展望が開けたことは、画期的なことといえる。今後の議論が深まるきっかけとなるだろう。英語研究者の、世界に向けて発信するというその意気やよし。今回は、先ずはそれらの紹介から始めたい。

1. Vicki Anderson and Stuart Davis, “Where American English Meets German: Devoicing in Pennsylvania Dutchified English” (日本音声学会『音声研究』第17号第1巻)——米国ペンシルバニア地域のドイツなまり英語(PDE)においては、末尾子音無声化を持つドイツ語に似た、障害音無声化という現象($bed[d] > bed[t]$)がある。これは頭子音位置にも出現($há.b[p]it$)するが、強勢音節の頭子音位置には出現しない($ha.b[b]itʉal, hó.li.đ[d]äy$)。この理由を、最適性理論の枠組みでフット構造に言及して説明する。言うなれば、これは、Steriade(1999)やBlevins(2003)が主張する、フット構造などを用いない「licensing by cue」分析の妥当性に疑問を投げかけるものとなる。ドイツ語とアメリカ英語の言語接触現象を説明するだけでなく、理論的な貢献をもなす、刺激的な論文といえる。

2. Michael Hammond, “Input Optimization in English” (出典同じ)——この論文は、リズム規則、鼻音接頭辞 *in-* における同化、過去形接辞 *-ed* 及び名詞複数形接辞・動詞三人称単数形接辞 *-(e)s* をめぐる有声同化と母音挿入を取り上げ、音韻論における入力表示が、lexical frequency を基にして、入力と出力をなるべく変えないように、また制約違反を最小限にするように調整されていること(Input Optimization)を最適性理論の枠組みで示したものである。これにより、英語音韻論において長年未解決であった過去形と複数形の基底表示を明らかにできたと主張する(過去形は /d/, 複数形は /s/ であると結論づけている)興味深い論考である。なお、最適性理論関係の論文では、副次強勢を持つ母音の一部を今までほとんどの研究者が「強勢を持たない完全母音」として取り扱い、無強勢母音としていたが、ここに来て風向きが変わりつつあるようである(*retail* [ri:téil], *naïve* [nà:i:v] 等でそれらを第

二強勢と記述し、議論している)。今後の流れに注目したい。3. Takeru Honma, “Trochaic Clusters in English” (出典同じ)——英語の /ft/, /sp/ および /sk/ の音連鎖は、語末では直前の単一母音と共に現れるが、複母音とは現れない。この現象は、語末のみならず語中の強弱脚内子音連鎖として現れる場合にも同様で、直前の複母音と共に現れないということを示す。このことを、*The Carnegie Mellon University Pronouncing Dictionary (CMUdict)* という電子発音辞書を用いて実証した。音韻論の研究においてもこのような電子データを使った研究が今後増えると思われる。ただし、*CMUdict* はデータ記述がやや不確かなところがあるので、注意して使用されたい。また、イギリス英語においては、*CELEX2* という電子発音辞書があり、これは出典がはっきりしており、比較的信頼できる。上記いずれの発音辞書も ASCII という完全なテキストファイル形式で記載されているので、いわゆる「正規表現」を用いた検索を縦横に行うことができ、便利である。4. Shin-ichi Tanaka, “The Duke-of-York Gambit and Other Opaque Derivations in English: Evidence for Harmonic Serialism” (出典同じ)——最適性理論のアキレス腱といえる「並列処理 (Serialism)」と真つ向から対立する「不透明性 (opacity) 問題」を解決するためには、最適性理論に直列派生ステップを設けた調和的直列モデル (Harmonic Serialism) が有効であることを示した論考である。5. Hisao Tokizaki, “Stress Location and Comparative Forms in English” (出典同じ)——英語の比較級には、形容詞に接尾辞 *-er* を付加する形態・統語的比較形と、形容詞の前に *more* を置く迂言的比較形がある。本論文ではこのような2つの型の分布を音韻的・類型的に調べ、世界の言語は、「形態・統語的比較形」、「迂言的比較形」、さらに「両方を兼ね備える」ものに3分類されることを示す。さらに、左寄りの語強勢を示すものは形態統語的比較級を持ち、右寄りの語強勢を示すものは迂言的比較級を持つという。英語は、語の中間に強勢を示す言語なので、両方の形式を持つことになる。新しい発見に満ちた啓蒙的な論考である。6. Ryuichi Hotta, “The Diatonic Stress Shift in Modern English” (近代英語協会『近代英語研究』第29号)——英語2音節動詞の強勢を後ろから前に移動させて名詞を生み出す操作 (例: *permit* (v.) > *pérmít* (n.)) に関して、豊富な実例を追加し、それらの時期、原因、過程を調べた。7. Yuriko Matsumoto-Yokoe, “Perception of Plosive-lateral Clusters: A Summary of Experiments” (日本音韻論学会『音韻研究』第17号)——/t/, /d/ という調音位置を同じにする語頭子音連続は、類型論的にみて有標性が強いので、/p/, /b/, /k/, /g/ 等の調音位置を異にする語頭子音連続よりも、誤った知覚を受けやすい。この現象は、日本語・英語話者のいずれにも観察されるため、普遍的なものだと考えられる。しかし、そのベクトルは両話者では正反対となる。日本語話者は、/t/, /d/ を /p/, /b/ と、英語話者は /k/, /g/ と知覚する。この差は、調音位置知覚に用いられる音響特性の相違によるものだという。8. Gábor Pintér, Shinobu Mizuguchi, and Kazuhito Yamato,

“Boundary of Prominence Perception by Japanese Learners of English: A Preliminary Study” (日本音韻論学会『音韻研究』第17号)——日本人英語学習者について、英語のプロソディック境界と卓立位置の知覚を調べ、英語母語話者と同じように、卓立よりもプロソディック境界のほうが優位であることを示した。9. 北原真冬・米山聖子「後続子音による母音長の変化: 幼児・成人の日本語コーパス分析と成人の英語学習データ」(日本英語学会『JELS』第31号)——英語の母音が、有声音の前では無声音の前よりも持続時間が長くなるという現象を考察の出発点とし、普遍的・音声的な基盤を持ちながらも、個別言語の音韻的特質によって抑制・促進されるような仕組みが言語には存在するのではないかと問うている。新しい発見を含んだ興味深い論考である。

単行本は下記4冊が目についた。

1. 岡崎正男『英語の構造からみる英詩のすがた——文法・リズム・押韻』2014. 開拓社。2. 菅原真理子(編著)『音韻論』(朝倉日英対照言語学シリーズ3)2014. 朝倉書店。3. 竹林滋・斎藤弘子・清水あつ子『初級英語音声学』(改訂新版)2013. 大修館書店。4. Hideki Zamma, *Patterns and Categories in English Suffixation and Stress Placement: A Theoretical and Quantitative Study*, 2013, Kaitakusha.

国外に移る。英語の音声学・音韻論の分野において、33篇の論文が見出された。紙幅の都合上興味深いと思われるものを、タイトルのみになるが順不同で5篇のみ示す。

1. Kristina Kösling, et. al., “Prominence in Triconstituent Compounds: Pitch Contours and Linguistic Theory” (*Language and Speech* (以下LS) 56) 2. Caroline Féry, “Focus as prosodic alignment” (*Natural Language & Linguistic Theory* 31) 3. Giorgio Magri, “The Complexity of Learning in Optimality Theory and Its Implications for the Acquisition of Phonotactics” (*Linguistic Inquiry* 44) 4. Sabine Arndt-Lappe and Ingo Plag, “The role of prosodic structure in the formation of English blends” (*English Language and Linguistics* 17) 5. Eleni Pinnow and Cynthia M Connine, “Phonological Variant Recognition: Representations and Rules” (*LS* 57).

単行本は、18冊が出版された。その中で主なものを順不同で4冊のみ示す。

1. Margaret Thomas (ed.), *Roman Jakobson* (4 vols.), 2014, Routledge. 2. Clive Upton and Bethan Davies (eds.), *Analysing 21st Century British English: Conceptual and Methodological Aspects of the ‘Voices’ Project*, 2013, Routledge. 3. Long Peng, *Analyzing Sound Patterns: An Introduction to Phonology*, 2013, Cambridge UP. 4. Donka Minkova, *A Historical Phonology of English*, 2013, Edinburgh UP.

なお、今回検討した今期の文献107篇(冊)の全リストは http://eym.sakura.ne.jp/public_html/en/2015/en2015.html に掲載されている。(福岡大学教授)